外務省が消した日本人
—南米移民の半世紀—
若槻泰雄著 毎日新聞社
2001年 249p. 1,800円(税別)

本書の発売は、昨年、地理教育研究会主催の南米アンデスの旅から帰国した頃であった。帯の文章がショッキングである。「命を賭して告発する！1万6000人も日本人移民を南米の密林に棄てた外務省。その無情な行政と現地で格闘し続けた担当者が、今なお変わらぬ官僚たちの腐敗と行状を証言する。」

著者は日本海外協会連合会（現国際協力事業団）で10年移住の仕事に携わった。本書の3分の2は著者が1959年から3年間滞在したボリビアのサンファン移住地にあてられている。当時の惨状は想像をこえる。道路もなく、雨季には雨が降り続く樹高30mもの大木が密生する原生林に、次から次へと移住者が送り込まれる。著者の最初の仕事は、絶望で自暴自棄になった移住者達に移住地建設の気力を取り戻させることであった。また、国は自らの約束も責任も果たさず、道路建設費融資に全員の連帯保証を要求していた。これらの困難な仕事を成し遂げ、移住地運営をようやく軌道に乗せて帰国したのに、外務省に批判的であった著者は辞職を迫られる。川に橋を架ける予算もブルドーザーの修理費もない状況の中で、予算を費目外に流用したというのである。

実はこの移住地を私達は訪問してきた。中心地の広い道（舗装は昨年工事開始だという）を挟んだ潇洒な建物とその周囲に広がる広大な耕地。かつては、鬱蒼とした密林であったと誰が信じようか。移民資料館も見学し、日系人学校と交流会も持ち、サンファンの移民定着率が20%にすぎないことや、「金持ちとインテリはみな逃げ出した。」という話はその時間いてきたが、これほどの惨状だったとは……。改めて外務省の無責任さに腹が立つと共に、苦難を乗り越え、今やボリビア社会で存在感を持つまでに移住地をつくりあげた人々に頭が下がった。

移民は元来豊かな国に移動するものだが、日本政府はこの大原則に反して、気候も厳しい辺境の地に送りこんだのである。外務省の続く不祥事に驚かされている私達は、この本を読み、問題の根が深いことを知る。タイムリーな出版である。勇気をもって事実を明るみに出してくれた著者に感謝したい。

私立昭和学院高等学校 西岡陽子

日米同盟半世紀—安保と密約
外岡秀俊・本田優・三浦俊章 著
朝日新聞社
2001年 640p. 2,500円(税別)

2001年は日米安保条約が調印されて半世紀を迎えた年だった。本書は、この50年間にわたる日米安保体制の成立から変容の過程を時代別に叙述した通史で、朝日新聞社の3名のジャーナリストによる600ページをこえる力作である。

前半部分は、おもに機密を解除されたアメリカ外交文書を素材にして、後半部分は両国の政権中枢の人物へのインタビューによる事実確認をしながら叙述されている。また、その時々々の両国の国内政治状況も丹念に視野に入れながら書かれている。

内容の概略は、旧安保の締結から60年安保改定、72年沖縄返還を扱った「Ⅰ脱占領と冷戦」、78年の旧ガイドラインから80年代のシーレーン防衛へと「新冷戦」下の日米の緊密化を扱った「Ⅱ同盟強化への道」、90年代の湾岸戦争から朝鮮半島危機、日米安保再定義を扱った「Ⅲ冷戦後の同盟漂流」、60年安保改定交渉時の「核持ち込み」と朝鮮半島有事の際の在日米軍の戦闘行動の事前協議に関わる「密約」を扱った「Ⅳ密約」の4節からなっている。

本書を読み終え、日米安保50年の歴史に2つのキーワードが浮かびあがってきた。それは「沖縄」と「核」である。沖縄の米軍基地は、アメリカの東アジア戦略の要の基地として、返還前は安保の適用外の存在として安保を外側から支え、返還後は内側から安保を支える核心に位置付けられてきた。一方、核兵器は広島・長崎を経験した日本国民の感情とアメリカの核戦略との矛盾から、一貫して日本への配備、持ち込みが「密約」のベールに隠されて扱われてきた。

普天間基地の県内移転に見られるように沖縄の米軍戦力は維持する、核のプレゼンスに対して日本側からの制約は受け入れない、アメリカは終始一貫この点は譲ろうとはしない。それは「綿密な世界戦略に立脚して日米関係を管理しようとする米国の圧倒的な意思と、その時々々の情勢に左右されながら明確な展望を欠きがちな日本の政策決定」の結果、日本国民に押しつけられている。日米同盟半世紀の「真実」の一端がここに見えてくる。

埼玉県立戸田高等学校 関原正裕